
はなひらかねど

清久 志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はなひらかねど

【Nコード】

N2736Z

【作者名】

清久 志信

【あらすじ】

恋愛無関心な咲子は、双子の妹・妙子の所為で大嫌いな合コンに出る破目になる。

そこで出逢った晴希は偶然にも同じ大学・同じ学部の所属だった。これまでの経験から恋愛食傷気味になっているという晴希とは、何となくウマが合い友達付き合いが始まったのだが。。
恋愛嫌悪な二人が織りなす、ちよっと変わった友情恋愛物語。

序章 はな 糸ひもせず

ああ、面倒臭い。

目の前に広がる光景に、咲子はうんざりしきっていた。さすがにそれを表に出すことはしないが、ただただ、この愛想笑いと媚のセール会場　いわゆる合コンという状況から離れたい思いでいっぱいだった。

本来、咲子は合コンなど好きではない。それどころか、むしろ嫌いだ。

けれど、その咲子がこの場所に来なくてはならなくなったのは、ひとえに双子の妹である妙子の所為だった。

数日前、どうしてもあと一人足りないのだと、高校時代の友人が妙子に電話を掛けてきた。だが妙子には、どうしても外せない用事があったらしい。いつもならば、嬉々として参加するのだろうが、残念そうな声を上げていたのを覚えている。

しかし、そのすぐ後にとんでもないことをその友人に言ったのだった。

「ごめんねえ。行きたいけど無理そうだから、代わりにサキを行かせるわ」

何を勝手なことを、と反論する前に、妙子はさっさと話を終わらせ、電話を切っていた。

「アンタ、何やってくれてんの？」

「どうせ暇でしょ？　家にいたって本読んでるかレポート書いてるくらいじゃなあい」

「合コンなんかより、そっちの方がよっぽど有意義だわ」

あまりにもこちらの都合を考えない妙子の行動に、怒りを通り越

して呆れてしまう。そもそも、怒っても無駄に体力を消耗するだけだと咲子は知っていた。妙子は昔から他人を振りまわすことが得意なのだ。しかも、本人には悪意がないから余計に性質が悪い。

咲子にとって妙子という存在は、身内でなければあまり関わり合いになりたくないタイプの人間だった。

「でもさあ、キョウちゃん本っ当に困つてたのよあ？ 友達が困つてたら、助けるのが友情つてもんじゃなあい？」

こんな台詞も端から聞いていると、ただ都合良く言い訳しているように聞こえるのだが、妙子の場合は本当にそう思つて言っている。目の前の困っている人を助けたいという、実に純粹な親切心なのだ。が、その際に犠牲になるのは妙子自身ではなく、周りにいる近しい人間であり、特に咲子はその対象になることが多かった。

妙子がもう少し思慮深く、自分自身の慈悲深い行動によって周りにもたらず影響などが考えられたならば、そうはならなかつただろう。しかし、幸か不幸か 咲子にとっては確実に不幸なのだが

妙子には目の前の問題を処理することで精一杯、という能力しか備えていなかった。

そして更に不運なのは、そういった迷惑を被る状況になつたとしても、咲子にはそれを切り抜けられるには十分な判断力や思考力、実行力などがあつたことだろう。

今までにも妙子の安請け合いで、本来やるはずではなかつた仕事を手伝わされたり、足りない人員の補充要員にされたりもしたのだが、咲子はもともと何事も器用にこなす為にさほど困難な事態に陥つたことがない。反対に安請け合ひした張本人である妙子は、不器用で鈍臭いので、手伝う分だけ邪魔になつたりもする。

結果、妙子は大した仕事もせず、簡単に誰にでもできる仕事を回され、咲子の方には難解で手間のかかる作業が回ってくるのだつた。しかし、そういった仕事をやらされる破目になるならまだいい。

事務的な仕事はけして嫌いではないし、終わった後に達成感もあり、時にはそれなりの見返りさえある。

だが、合コンなど異性に興味のない咲子には何の得もない。『ゴウコン』じゃなくて、『ゴウモン』よ、と心の中で毒づいた。

「そんな嫌そうな顔しなくなっただっていいじゃない。サキ、彼氏いないんだし、問題ないでしょ？」

「彼氏がないとか関係ないの。合コン自体が嫌いなんだから」

「それは知ってるけどお。ほらほら、キョウちゃん達と久しぶりに遊ぶって考えたらいいのよお。男の子たちはそのオプション程度って考えて、ね？」

小首を傾げて屈託なく笑う妙子。その仕草はいかにも可愛らしく、男受けもいいのだろう。同じ顔をしていても、自分には到底できない表情だと思しながら、咲子は大きな溜め息をついた。

「あ、明日の晩ご飯はサキの好物ばっかにするからあ！ 何がいい？ 生姜焼き？ 唐揚げ？ お豆腐のハンバーグ？ 最近寒いし、豚汁も作ろうかあ？」

咲子の機嫌を取ろうと、妙子は途切れる間もなくまくしたてる。

そんな必死な姿を見ると、やはり咲子は妙子を憎めなかった。これも身内の情なのか、それとも慣れからくるものなのか。

「それなら、ブリ大根と蓮根のきんぴらも作ってよ」と結局許してしまうのだった。

そんな数日前の甘い自分を怒鳴りつけてやりたい。

そう思いながら、目の前に並んでいた揚げ物を一つ口に運ぶ。ギトギトの油と濃過ぎる味付けの所為で、すぐに箸を置いてしまった。口直しに含んだカクテルは水っぽく、不味さが口中に拡がっただけで、気分は下降線をたどる一方だ。

それにひきかえ、合コンは現在、比較的和やかに進行していて、お互いの学校や仕事の話で盛り上がっていた。

咲子は時々相槌を打つ程度に反応はしていたが、途中からそれも疲れて辞めてしまっていた。どうやら周りもさほど咲子を気にして

いないようだ。特に男性陣は、自己紹介や質問をし合った段階で咲子にあまり興味が持てなかったらしい。高校時代のクラスメイトたちも、咲子の性格は熟知しているし、むしろ大人しくしてくれている方が自分の気になる相手と親密になりやすいと思っっているのだろう。無理やり咲子を話に加えるような真似はしなかった。

そのまま合コンは、咲子を空気のようにした状態で終えるのだろうと思っっていた時、目の前に移動してきた男がいた。

「岡本さんって、無口なんだな」

「え？」

まさか話しかけられると思っっていなかった咲子は、咄嗟に何も返せなかった。

改めて声の主に視線を向けると、自己紹介で渡辺晴希と名乗った男だと思い出す。

「えっと、渡辺君、だったかしら？」

「あ、覚えてくれてたんだ」

「顔と名前を覚えることは得意だから」

勘違いされては困ると思ひ、遠回しに特別な意味はないことを伝える。大抵の場合、咲子のこついつた態度で相手の男は気分を害するのだが、晴希は変わらず笑顔で話を続けてきた。

「そっかー、それ羨ましいな。俺結構苦手でさ。接客業やってるのに駄目だよな」

「そうね。致命的じゃない？」

「はつきり言うなー。ま、自分でも自覚してるから、返す言葉もないけどさ」

明らかに冷たいと思われるような咲子の態度だったが、晴希はそれでも気にする素振りもなく話しかけてくる。

これ以上に冷たい態度をとり続けてしまつては、周りの雰囲気も悪くなると思ひ、咲子は少々晴希の話し相手になつてやることにした。

「さっき聞いたんだけど、渡辺さん、A大なんだろう？ 何学部？」

「経営学部だけだ」

「マジで？ 俺も経営なんだけど」

「渡辺君もA大なの？」

偶然にも同輩がいたらしい。しかし同じ学部とはいえ、一学部の人数は何百人という。晴希の存在を知らずにいたのも、無理はなかった。

「すつげえ偶然だなー。でも、全然岡本さんのこと知らなかったわ」

「そうね。でも、『お』と『わ』だったら学籍番号も離れてるし、そんなもんじゃない？ 基礎演や第二外語は、絶対に同じクラスにはならないじゃない」

「そりゃそうだ」

何が面白いのかわからないが、晴希は咲子の淡々とした説明にも楽しそうに頷いていた。

咲子は、こういう人見知りなく、誰にでも親しげに話しかけるタイプは苦手だ。まるで、自分の双子の妹が男になったのではないかというような、錯覚を感じてしまうからだ。

ますます早く終われと念じる想いが強くなるが、飲み放題の終了時間まであと三十分はある。

時計の針の進む速度が速まるはずもなく、咲子はただ、面白味を感じられない晴希の世間話を淡々と聞き流し、適当な相槌を打つだけの人形のようにならざるを得なかった。

「じゃあ、そろそろ二次会のカラオケに突入しようか？」

男性側の幹事の声掛けに、咲子はようやく解放されると安堵の息をついた。

最初から、二次会には参加しない約束だったのだ。それに、自分が参加しない方が盛り上がるだろうことは易々と想像できた。

幹事が清算を済ませている間に、他のメンバーは店の外へと歩き出す。最後尾に連なりながら、咲子はこの後の予定を少し考えた。

両親は飲食店を経営しているので、定休日以外は帰りが遅く、普段から咲子と妙子は交代で夕食を作っている。

今日は丁度妙子の当番であったが、彼女も出掛けているはずだ。当然家に真っ直ぐ帰ったとしても誰もいないし、食事の準備などもされていない。

居酒屋の料理があまりにも不味すぎて、ほとんど口にしていない咲子は空腹感をどうにか鎮めたかった。そういえばと、この辺りに自分好みの定食屋があったことを思い出し、そこに寄ってから帰ることに決定する。

幹事の二人が店から出てくるのを見計らって、先に帰ることを告げた。

女性陣はもともと咲子が二次会不参加ということを知っていたので、気をつけてねと声を掛ける。

逆に男性陣は、表面上は残念そうな声を上げて、咲子の暇を惜しむ様子を見せていた。

それに咲子も「ごめんなさい。また誘って下さいね」と我ながら嘘くさい愛想を返し、手を振ってその場を後にする。

しばらく歩いて人混みに紛れた頃、咲子は特大の溜め息をついた。「あー、疲れた！ まったく、この疲労分は夕エに返してもらわないとね」

家に帰ったら妙子に嫌味を言っただけだと心に決め、目的とする定食屋へと足取りも軽やかに向かおうとする。

しかし、数歩歩いたところで、誰かに呼ばれたような気がして、反射的に足を止めた。

何となく嫌な予感を感じながら、ゆっくりと振り返る。

妙子から数メートル後方、笑顔を湛えて駆け寄ってくる渡辺晴希の姿が見えた。

第一章 はな しらぬひと

すっげえ、つまんなそう。

初対面の相手に対して失礼な感想だとは思ったけれど、それが晴希の率直に感じた印象だった。

岡本咲子と自己紹介をした彼女は、明らかに他の女性メンバーと異なる雰囲気を持っていた。一言でいえば、クール。細かく説明をすれば、無口で媚びなくてマイペースで、それでも最低限周りの雰囲気を壊さない程度に気を遣っている。

多分、この合コンに関しては、彼女の本意で参加しているのではないのだろう。晴希はそう読んでいた。

だからこそ、興味が湧いたのだ。どんな人なのだろうと。

しかし、それは彼女を『女』として 言い換えれば、恋愛対象として ではなく、『一個人』として気になったという意味だ。

何より晴希が一番気になったのは、コンパが始まって最初の方にあった質問に対しての答えだった。

それぞれ一人ずつから質問を出し、それを順に答えていくという形式で、一人の女の子が発した質問が『初恋はいつ、どんな相手？』というものだった。ありきたりと言えればありきたりな質問だ。

それに対して咲子の答えは、一瞬誰もが驚くようなものだった。

「初恋はしてないわ」

短く素っ気ない答えに、質問を出した女の子は「まさかあ」とか「何かちよっとくらいはあるでしょ」などと新たな答えを引き出すうとしていたが、咲子は曖昧に微笑むと「本当にないわよ。多分、この先もね」と付け加えただけだった。

白けてしまいそうな空気になったが、そのまま咲子が「じゃあ、私が質問する番ね」と上手く話を切り替えたので、その後も場の雰囲気は保たれた。それでも、その咲子の一言はメンバー全員に、更

に言つと、男性陣全員にかなり強いインパクトを与えた。良い意味でも、悪い意味でも。

その後も、予想通りともいうべきか、咲子の存在は少し異質だった。

積極的に話に加わらない。しかし、適度に相槌は打ったりして、話は聞いている様子。

まるで空気のように存在して、彼女は彼女だけのペースで動き続けている。それでも妙に浮いてしまわないのは、絶妙なバランス感覚を備えているからなのだろうと思えた。

しばらく離れて様子を窺っていた晴希だったが、他のメンバーの恋愛話や自慢話にも飽き、それ以上に咲子と話がしてみたいと思つて、彼女の前へと移動した。

話しかけられた咲子は驚き、多少冷たいとも思えるような言葉もあつたが、あからさまに嫌がる態度はとらず、晴希の会話に付き合つてくれた。

多分、こうして話しかけられるのも嫌いなんだろうとは思つてはいたものの、それでも晴希は咲子と色んな話をしてみたかったのだ。とはいえ、最初からあまり細かいことを訊いたりしても失礼だと思ひ、とりあえずは世間話程度の話題で間を繋ぐ。

まだ二次会もあることだし。そう思っていたのだが、居酒屋を出た彼女が「用があるから先に帰る」と言い出したことは予想外だった。

少し考えれば、無理やり付き合わされた咲子が一次会だけで帰つてしまうことも十分に考えられたのに、悠長に構えていた自分自身の浅はかさが恨めしい。

二次会の会場に向かおうとしている幹事を慌てて呼び止め、晴希は手短かに帰ることを伝えた。幹事を務める友人は顔を顰めて答える。「晴希、岡本さんは美人かもしれないけど、辞めといた方がいいと思うぞ？ なーんかお高くとまってるって感じじゃん。絶対男を見下してるタイプだって」

「そんなんじゃないって。女の子一人で帰したら危ないだろ？ それにもともと、俺は人数合わせなんだしさ。岡本さん帰ったなら、俺がいなくなっただ方が数合うだろ」

「いや、まあ、そうだけどさ」

「んじゃ、またな。楽しんでこいよ」

軽く肩を叩くと、晴希はくると身を翻し、咲子の消えた方角へと駆け出した。まだ居酒屋の前で別れてからそれほど時間は経っていない。

さほど走らなくても、すぐに咲子の後ろ姿を見つけることができた。

「岡本さん！」

あと数メートルというところで、声を掛ける。咲子の足が止まり、ゆっくりと振り返った。思わず笑みが零れると、咲子は少し訝しうに「どうしたの？」と訊ねてきた。

「いや、女の子一人帰らせたら危ないと思ってさ」

「別に大丈夫よ。そんなに遠くもないし、まだ遅い時間でもないし。素っ気なくはあるが、冷たくは感じない程度の口調で、咲子は晴希の申し出を断ろうとしているようだった。しかし、実際は自分を鬱陶しく思っているのだろうということくらい、晴希は承知していた。

「てかさ、実はそれはただコンパを抜け出す口実で、ホントは岡本さんと話したかっただけ」

晴希が正直に告げた途端、咲子の表情が目に見えて強張った。そのまま無言で踵を返し、歩き始める。

「あ、ちよっと！ 誤解しないでほしいんだけど！ 俺、別に岡本さんを口説こうとかそういうんじゃないから！」

慌てて晴希は後を追いつ、咲子の隣に並ぶ。

「じゃあ、何？ 私は彼氏とか恋愛に興味ないわよ」

「うん。むしろ、岡本さんのそういう部分に興味があんの」

刺々しくなる咲子の態度に負けず、晴希は居酒屋では話せなかつ

たことを語り始める。

「俺も今、彼女とかいらなんて思ってるし、今日の合コンも数合わせだったわけ。で、今までにも『彼氏いらな』とか言ってる女の子には何人かあったことあるけど、岡本さんはその子たちとも何か違うなーって思っで、ちよつと話をしたくなつたんだ」

そこまで話した瞬間、咲子の足がピタリと止まる。

自分の熱意が通じたのかと思っでいると、咲子は晴希を見上げて少し迷惑そうに言った。

「どうでもいいけど、どこまでついてくるつもり？」

「とりあえず、家までかな。送っでいく間だけでも話し相手になっでくれたらいいんだけど」

さすがに面と向かっで目障りだと言われるかもしれない。そう思っで覚悟を決めた晴希に、咲子は呆れたよつな溜め息をついた。

「私、すぐそこの定食屋に寄るつもりなんだけど、渡辺君どうする？」

「え？」

「だから、さつき居酒屋で結構食べたんでしょ。定食屋はきついいじゃないかっで訊いてるの」

その言葉が、遠回しに話に付き合っでくれるという意味だと気付き、晴希は思わず声高に叫んでしまった。

「あ、問題ないない！俺の胃袋のキャパは、居酒屋程度では埋まらないから！」

「そ、そう……」

晴希のあまりの勢いに押され気味な咲子だったが、すぐに気を取直すと、「こつちよ」と晴希を促した。

案内された先は、家庭的な雰囲気の漂う店。なかなかの人気店らしく、店内はサラリーマンから家族連れ、大学生まで様々な客層で賑わっでいる。

案内されたテーブルに向かい合っで腰を下ろすと、咲子はすぐさまメニューを広げで晴希にも見せてくれた。

「ここ、何頼んでもハズレないわよ。さっきの居酒屋と違ってね」
微かにのせられた嫌味が、合コンに対する咲子の不満の一部を覗かせた。

咲子の言うとおり、あの居酒屋で出された料理は、お世辞にも美味しいとは言えなかった。

「確かにあれは微妙だったな。ま、安いから仕方ないと言えば仕方ないんだけど」

「安くても美味しいお店はあるわよ。あそこは完全に店の雰囲気ですら誤魔化してるだけ。お酒も全然美味しくないし」

「岡本さん、厳しいねー」

色気より食い気、などと言っては失礼になるだろうが、咲子の発言はまさにその言葉が相応しい気がした。見た目のクールの印象とは、また違った側面に、晴希はつい顔を綻ばせてしまう。

「親が飲食店やってるからね。渡辺君、決まった？」

「うん。俺のどストライクなのがあったし」

晴希の返事に頷くと、咲子は恥ずかしがるそぶりもなく、少し声を張って店員を呼んだ。

「すぐさま「お伺いいたします」と笑顔を湛えた女性店員が注文を受けにくる。

「『和風デミハンバーグ定食』を一つと……」

「あ」

咲子の注文に思わず声を洩らしてしまった。まさに晴希が頼もうと思っていた品だったからだ。が、今更決め直す間もなく、咲子に悪い気がしながらも、「同じのをご飯大盛りで」と付け加えた。

店員が注文を確認し戻っていった後、咲子が少し不思議そうに訊ね掛けてくる。

「何でそんなに申し訳なさそうに注文するわけ？」

「え？ ああ、何となく、被ると嫌なんじゃないかなと思って」

「……まあ、確かに親しい人とだったら被らないようにするけど」

「うわー、はつきりと親しくない人宣言された」

「親しくはないでしょ。今日会ったばかりなんだし」

咲子の言葉は冷たく切り捨てるようにも取れるが、見事なまでに正論でいっそ清々しかった。

本当に、晴希の今までの人生の中で、周りにはいなかったタイプだ。咲子に対する晴希の興味が、また一つ高まる。

「岡本さんさ、何で恋愛に興味ないの？」

「渡辺君だって、彼女要らないでしょ？ 似たような理由じゃない？」

触れられたくはないのか、それとも単純に話すのが面倒なだけか、咲子はちゃんとした回答を寄越してはくれなかった。

しかし、それではわざわざ追いかけてきた意味がないと思い、晴希は食い下がる。

「いや、俺とは違うでしょ。俺の場合は、一応色んな子と付き合ってきた結果、恋愛食傷気味になっただけで、もともと恋愛に興味がないわけじゃないし。岡本さんの場合は、完全に人生の上で恋愛不要と思ってるんじゃないの？」

「不要、ってわけじゃないけど、ね……」

億劫そうではあるが、咲子は話し始めた。

「恋愛って、他人のを見てるだけでも疲れるの。私、双子の妹がいるんだけど、その妹が私と正反対の超恋愛体質でね。あの子の一挙一動見てたら、それだけでもうお腹いっぱいって感じ」

心底疲れると言いたげに、咲子は肩を竦める。そしてその疲れを癒そうとするかのように、水を一口含み、喉を潤した。

「でも、別にそんなに珍しくもないでしょ。私みたいに、『彼氏は要らない』『恋愛に興味はない』って言ってる子、結構いるわよ」
「確かにいることはいる。でも、その場合は、俺と同じように『痛い目を見た』だとか、『うんざりしてる』ってタイプか、そういうことを言っただけ逆男の気を引こうとする口だけタイプか、どっちかなんだよな」

全ての女性がとは言わないまでも、今までに自分が関わった異性

を思い返すと、ほとんどがこのパターンに当てはまっていた。

しかも後者は意外に多く、常日頃から「男なんて興味ない」などと言っていた女子が、いわゆる『イケメン』から告白された途端にあっさりと付き合った、などという光景を晴希は何度も見ていた。

「それにさ、初恋してないってのが珍しい。『男要らない』タイプの女の子でも、大抵は初恋くらいしてるから」

「渡辺君の言い方だと、私は超異端児みたいね」

多少失礼にも思える晴希の発言だったが、咲子はそれに不快さを滲ませることもなく、むしろ面白がるように声をたてて笑った。

少しは警戒を解いてくれたようだと思うと、晴希の口からは自然と安堵の息が笑みとともに零れ落ちた。

「確かに異端児かも。勝手なこと言うけど、岡本さんだったら、まともな異性の友達になれそうな気がするんだ」

「異性の友達、ね」

小さな呟きを洩らすと、咲子はわずかに苦々しそうな表情を見せる。

何か嫌なことを思い出させてしまったのかもしれない。せつかく友好的な雰囲気になり始めた途端の躓きに、晴希は心の中で自分に對して舌打ちをした。

「本当に、男女間での友情って成立するのかしら」

「岡本さんは、有り得ないと思ってるタイプ？」

「昔は信じてた。でも、途中から信じられなくなった、ってところかな」

だから、男友達もいないのよ、と咲子は苦笑を重ねる。

咲子の発言から考えると、過去に友人と想っていた異性と何かあったのだろうか。

「まあ、難しいと言えば難しいのかもしれないけどさ」

「ちよつと、今言ってたことと違うじゃない」

「一般論としてってことだよ」

咲子から軽い批難を受け、晴希はすかさず弁解に入った。

「中学とか高校の頃って丁度お互い成長期だからさ、それまで異性として意識してなくても急に気になったりもするもんだしさ」

小学校からの同級生が、気付いたら体型も変わり、おしゃれなどにも気に掛け始め、一気に大人びてくる。

かつては平気で手を繋いだりできた相手に、軽く触れることすら躊躇われてしまう。

それは思春期特有の感覚だろう。

そして、異性を意識し始めると同時に、自分の恋愛対象としての枠に入るのか入らないのかを、どこかで測っているように思える。

咲子はさばさばとしているけれど、女らしさもちゃんと持ち合わせているし、気遣いもできる性格だ。客観的に見れば、外見的にも内面的にも、そういった思春期の男子の多くから恋愛対象として見られてしまうのも仕方がないだろう。

「岡本さんの場合、充分美人の部類に入ると思うんだよね。あ、これは俺の好み云々は抜きね。だから、友達として見ようと思っても、無理な部分はあると思うんだよ」

「でも、渡辺君はさっき、友達になれそうっていったじゃない」

「だって、今の俺は可愛らしい思春期の男の子じゃないし」

そう言ってニツと口角を上げると、咲子は一瞬面食らったような表情になり、数瞬後小さく吹き出して押し殺した笑いを零した。

そこに注文した定食のお盆を二つ持った店員がやってくる。

笑いを堪えながら咲子ありがとうと料理を受け取ると、一口水を飲んだ。それでようやく落ち着いたので、とりあえず食べようと晴希を促した。

「美味そー！ めっちゃ腹減ってきた！」

ふんわりとした淡い湯気を立てたハンバーグには、濃厚な褐色のソースがかけられ、肉の焼ける匂いとソースの焦げる匂いが混じり合って食欲をそそる。

副食には野菜の炊き合わせとサラダが添えられていて、味噌汁も具沢山。

六百円という値段から考えると、満足過ぎるポリユームだ。お金にあまり余裕のない晴希には、有り難過ぎる料金設定だった。

頂きますと手を合わせると、さっそく箸をとり、メインのハンバーグを一口頬張る。

見た目よりもあっさりとした風味のソースに、ジューシーな肉の旨みが絡み合っつて口中に拡がった。

「ウマっ！ 岡本さん、この店ナイスチョイス！」

「お気に召してもらえて良かったわ」

晴希が勢いよく食事をかきこむ姿に、咲子は多少呆れたような表情ではあったが、それでも嬉しそうな感情も見取れた。

そして咲子自身も料理を口に運ぶ度に、本当に美味しそうに表情が綻んでいる。

居酒屋にいた時とはまったく違う咲子の雰囲気、晴希は興味深く観察していた。

「……それで、今は『可愛らしい思春期の男の子』じゃない渡辺君は、何で私と友達になろうと思ったの？」

晴希の観察するような目に気付かないのか、それとも気にしていないのか、咲子は食事を堪能しながらも先程の会話に戻してきた。

口に入れたばかりの炊き合わせのかぼちゃを急いで咀嚼し、お茶で流し込んでから晴希は口を開く。

「『女』ってさ、正直面倒なんだよな」

「女を目の前にしていう台詞？」

「岡本さんは女だけど異端児だから例外。じゃなくて、俺が今まで関わってきた女のこと」

話しながら思い返してみると、思わず表情を顰めてしまう。

が、そんな顔をしていては、美味しい料理とそれを紹介してくれる咲子に失礼だと思い、すぐに改め、笑顔を作った。

「俺さ、スポーツサークル入ってるの」

「スポーツって何の？」

「色々。フットサルしたり、3on3したり、テニスしたり。特定

のスポーツばかりするんじゃないかと、やりたいことは何でもするから『スポーツ』サークルなわけ」

「なるほどね」

今まで話した咲子の印象から考えると、サークル活動などにはあまり興味がなさそうだった。そう思い、更に詳しく説明を続ける。

「まあ、運動は好きだけど、大きな大会目指して鍛錬するってのは大学に入ってまでしたくない、ってヤツが多いとこなんだ。俺もそうだしね。でもって同時に、運動できると女の子にちやほやしてもらえらるって考えてるヤツも多いわけ」

「要するに、スポーツがメインのイベントサークルって感じ？」

「そう、まさにその通り！」

皆まで説明しなくても、咲子がピタリと言いたいことを汲み取ってくれたので、晴希は思わず声を高くしてしまった。

一瞬近くの席のサラリーマンがびっくりしたような視線を向けたので、恥ずかしくなってすぐさま声音を落とし、誤魔化すように箸を動かす。

「そ、それでさ、うちのサークルに入ってくる女の子も八割方男目当てなんだよ」

「まあ、イベントサークル紛いなら、それは仕方ないでしょうね。でも、それは男の子も嬉しいんじゃないの？」

「女目当てのヤツはね。俺はスポーツを楽しみたい派だし、やっぱり女の子いると気を遣うからさ。あんまり激しいスポーツには参加させられないし、かといって、いつも応援ばかりさせてるのもないって。俺以外にもそう思ってる奴は何人かいるよ」

晴希の所属するサークル内では、はっきりとスポーツ派と出逢い派に分かれている。スポーツ派としては、あまり男女間の親交を深める為のイベントなどはしたくはないのだが、圧倒的多数を誇る出逢い派は、そういったイベントに意欲的だ。不満を感じて、スポーツ派ばかりで新たなサークルを作る話も出たのだが、人数が集まらずに断念した過去があった。

それでも、他の同系統のサークルよりは、スポーツもちやんとやっているということで、スポーツ派のメンバーたちは妥協をしたのだ。

「でもさ、女側からしたら、女目当てのヤツもスポーツしたいヤツも、みんな一緒に見えるわけ」

「そうなの？」

「そうなの。あからさまに、『彼女欲しいからココに入ったんでしょ？』とかいう女もいたし」

「つまり、それを言った女は『彼氏欲しいからココに入りました』ってことよね。何で他人も自分と同じ考えと思うのかしらね」

咲子の溜め息まじりの返事に、その通り！ と再び声を上げそうになったところを、際どいところで飲み込んだ。

自分を落ち着かせようと、またお茶を一口すする。

「ホントにそう。で、押し付けがましく『付き合っただけでもいいわよ』的な雰囲気漂わせてたりするんだよね」

「別にそんな子なら付き合わなくてもいいじゃない」

咲子に言われるまでもなく、実際晴希はそこまで我の強い相手とは付き合いはしなかった。けれど、付き合った後で、そういう本性を見せ始めた場合もあったのだ。

それを言つと、あっさり咲子は「それは渡辺君の見る目がなかったのね」と言い放つ。

「いや、まあ、そう言われたらおしまいなんだけどさー」

「もしかして渡辺君、そういうタイプの女の子とばかり付き合ってたわけ？ だったら真面目そうな子と付き合えば、恋愛も嫌じゃなくなるんじゃないの？」

「俺もそう思ってたさ、すごく素朴で控え目で、健気に尽くしてくれる子と付き合ってたわけよ」

咲子と同じことを思い、付き合ってた彼女のことを思い出す。

晴希にとつて、それは一番最近まで付き合っていた彼女だった。

特別顔立ちが整っているわけではないが愛嬌があり、いつもにこ

にこと笑顔を浮かべ、甲斐甲斐しく晴希の為に尽くしてくれた。
良い子だったのだと今でも思う。

けれど、だからこそと言ってもいいのかもしれない。

晴希の恋愛嫌悪に決定打を与えたのは、その良い彼女だった。

「良い子過ぎた」

「は？ 何それ？」

良い子なら問題ないじゃないと、咲子は納得できない様子だ。

「だからさ、すっごく尽くしてくるんだけど、それが重くなって……」

「ああ、そういうこと」

「ホント甲斐甲斐しく尽くしてくれてさ。風邪ひいた時なんか、特に助かったんだけど……。そのうち、それがしんどくなってきたんだよな」

贅沢を言っていると自分でも思うのだが、それでも彼女の献身を重荷に感じてしまった瞬間、関係が続けられないと悟ってしまった。それはただの我がままだと批難されるかと思っただが、意外にも咲子は少しばかり表情を曇らせながらも、困ったように微笑んでいた。「どうかした？」

「何かね、妹の話を聞いてるみたいだなと思って」

「妹さんって、さっき言ってた恋愛体質の？」

「そう。あの子も、本気で好きになったら、尽くして尽くして尽くしまくるタイプなの」

つまり、晴希の話の彼女が自分の妹と被ってしまい、複雑な心境に陥ったのだという。

妹の献身的な姿を知っている咲子にとって、晴希の発言は腹立たしく思っても仕方ないだろう。それなのに晴希を咎めようとはしない咲子が疑問だった。

「辞めればいいのって思うくらいに一途だね。ほんっと、馬鹿正直。それで騙されたことだってあるのに、あの子全然懲りないんだもの」

「……ごめん。不愉快な話だったよな？」

「そんなことないわよ。尽くされ過ぎると嫌になるって言うか、重すぎると思うのも当然じゃない？ 結婚するとかならまだしも、学生同士の恋愛なんて、そこまで発展する可能性だって低いんだから冷めている、というよりも、極めて冷静というべき口調の咲子に、少し前の会話を思い出した。」

『恋愛って、他人のを見てるだけでも疲れるの』

『あの子の一挙一動見てたら、それだけでもうお腹いっぱいって感じ』

恋愛は疲れるものと考えている咲子には、それに一生懸命になり過ぎている人間 特に双子の妹などは、理解しがたいのだろう。

同時に、そういう強い想いを向けられた場合、咲子自身も一歩引いてしまう性質のようだった。

「岡本さんって、やっぱいいわ」

「何よ、突然」

前触れもなく呟いた晴希の一言に、咲子の表情が俄かに険しくなる。

我に返り、自分の発言が誤解を招きかねないものと気付いて、慌てて訂正した。

「変な意味じゃないって！ 今までさ、こつという話を女にしたら、みんな揃って彼女の味方だったからさ。てか、男でも俺の味方してくれるヤツ少なかったし」

「別に渡辺君の味方をしてるわけでもないんだけどね。単に、渡辺君とその彼女の価値観や恋愛観が合わなかっただけでしょ」

晴希の弁解を聞いた咲子は、元通りの冷静で淡々とした調子に戻り、止まりがちだった食事を再開する。

それにホッと胸を撫で下ろし、晴希も話しっぱなしで進んでいなかった食事に箸をつけた。

「そうなんだけど、周りから言わせると俺はひどいヤツになるみたいだな。ま、俺もやっちゃいけないことをやってたって自覚はあるけ

ど」

「何したわけ？」

「作ってくれたご飯に、『もっとこうした方がいいよ』ってアドバイスしちゃった」

晴希の口から乾いた笑いが零れる。

咲子は「あー、それは可哀想ねー」と半分くらいしか気持ちの籠もっていない言葉を返した。

「いや、でもさ。俺、料理得意だからさ、正直なところ俺が作った方が美味かったわけ」

「でもそれは女の子の立場ないわね」

「だから、初めて作ってくれた時に思わず出ただけで、それ以降は言わなかったって」

晴希は自分の非を認め、その後何度か出そうになった助言を、ことごとく飲み込んできた。彼女は何かを作る度に晴希の様子を気にしていたので、ずっと気に病んでいたのだろうと思うと、余計に不憫でならなかった。

「もしかして、それが別れた原因の一つになってたりもするの？」

「う……。まあ、ないこともない」

『美味しい』以外の感想を述べようとしたら、ついつい余計なことまで言ってしまうようになる。その所為で、晴希は彼女の作った料理を食べていても、言葉少なになることが多かった。

けっして彼女の料理が不味いわけではないのだが、だからこそ、あと一歩足りない部分を教えたくなる。けれど、それを言うと、彼女のプライドが傷ついてしまう。周りの友達からは、『料理上手』の褒め声高い彼女だったので、なおさらその思いは強かった。

「そっか、それで私は夕工を許せるのね」

「夕工？」

「あ、さっきから話に出てる妹よ。妙子って言うの。夕工はね、不器用だし頭も悪いし考えも浅いし、良いところなんてほとんどないんだけど、昔から料理だけは上手いのよ。まあ、今は学校通ってる

から、当然と言えば当然なだけだね」

それまで妹を語る際には微妙な表情を浮かべてばかりの咲子だったが、今は珍しく嬉しそうに、そしてどこか誇らしげに微笑んでいた。

咲子にとって、妹の唯一自慢できる部分なのだろう。

「ほら、よく『旦那の胃袋』を掴めって言っじゃない。あれと似たようなもんよ。タエはホントろくなことしないんだけど、いくら腹が立ってても、美味しいご飯作るからって謝られたら、つつい許しちゃうのよね」

「胃袋掴まれてるの」と冗談めかして笑う咲子につられて、晴希も自然と頬が緩んでいた。

「じゃあ、俺も頑張って岡本さんの胃袋掴もうかなー。料理上手っての、友達としてポイント高くない？」

「本当に上手だったとしたら高評価ね。でも私、味には結構うるさいわよ」

「それは既にわかってるよ。でも、俺も結構研究してる方だからね」晴希自身、単なる料理好きではないと自負している。

美味しいと言われるお店にはお金の許す範囲で食べに行くし、料理の基礎なども独学だが学んでいた。

常日頃から自分でレシピを考えては、親しい男友達に試食してもらったりもしていたし、きっと咲子に美味しいと言わせられるだけのものができるだろうという自信があった。

「じゃあ、ご相伴に与れる機会を楽しみにしてるわ」

そう言っただけで、咲子は残っていた料理を綺麗に片付け、箸を置いてごちそうさまと手を合わせた。

その様子からは、上辺だけの社交辞令でないように思える。

「それってさ、これからも友達として付き合ってくれって取っついていいんだよね？」

「いいわよ。今のところ害はなさそうだし、同じ学部の友達いると色々助かることもあるしね」

そこまで言うてから、咲子は「但し」と付け加える。

瞬間的に真面目な表情になったので、晴希も思わず表情を引き締め、咲子の言葉を待った。

「渡辺君の料理が下手だったら、即縁は切れるかもね」

「え、そこ!？」

晴希のツツコミに対し、咲子はにんまりと悪戯な笑みを浮かべたのだった。

第二章 はな わづらはし

合コンの日以来、咲子は晴希と顔を合わせる機会が増えていた。今まで互いを知らなかった為に気付きようもなかったのだが、幾つか同じ講義もとっていたからだ。その流れで、そのまま昼食を共にすることも多かった。

それに加え、晴希と電話番号やメールアドレスも交換していた。咲子から連絡をとることはあまりなかったが、しつこくない程度に晴希から食事の誘いがあったのだ。

いつもならば、異性からの誘いなど煩わしく思うのだが、晴希の場合はそんな感情が湧かなかった。

晴希は、本当に『友達』として接している。そんな風に自然に信じてしまうのも、晴希と普段交わす会話のほとんどが、食べ物に絡んでいたからだ。

その会話の数々を思い出し、咲子は小さく笑いを零す。

晴希に誘われて出掛ける時は、大抵「
にあるお店が美味しいから付き合って」という誘い文句だった。

どうやら、晴希は美味しいと評判の店を、暇があれば回っているらしい。

注文した料理をじっくりと観察し、時にはスタッフに調理法などを聞いていたので、

グルメを気取っているわけでも、ただ食べ歩くだけが目的というわけでもなさそうだった。

不思議に思っ、ある日昼食と一緒に取っている時に訊いてみると、意外な、けれど納得できる答えが返ってきた。

「俺、将来お店出したいんだ」

少し照れながらも、晴希は自信をのぞかせてそう言い切った。

料理を食べて幸せそうな笑顔になる瞬間が好きなのだ、晴希自身が眩しいばかりの笑顔を見せた。

その笑みに、出先でも咲子が食事をとる様子を嬉しそうに眺めていたなと思いつく。

「でも、それだったら何で普通の大学入ったの？ 調理師学校とかもあるじゃない。それとも、大学入ってからお店出したいって思っただしたわけ？」

「いや、高校の時から思ってたよ。でもさ、お店持つのって料理できるだけじゃ駄目だろ？ だから経営の勉強もしようと思ってるね」
それから晴希は生き生きと瞳を輝かせながら、将来の夢について語り出した。

高校時代から、学校に禁止されているにもかかわらず、知り合いのお店で働かせてもらっていたこと。

その店の味と雰囲気が好きで、自分の目標としていること。

夢の為に、色んな店の味を知り、勉強し、自ら試行錯誤を繰り返しているということ。

晴希が料理に対して自信を持っていたのは、それらの積み重ねがあったからなのだとうやく咲子は合点がいった。

だが、一つだけ晴希の話に納得できない部分があった。

それは、晴希が持ちたいという店の種類だ。

「でも、どうして居酒屋？ それだけ頑張ってるなら、小料理屋とか洋食屋でもいいじゃない」

咲子の疑問に、晴希は笑みを更に深めた。

「咲子さんさ、居酒屋の率直な印象って何？」

「そうね……。学生やサラリーマンが多い、比較的安い、但し料理やお酒はイマイチなこと多い。こんなところかしら」

指折り数えながら咲子が一つ一つ挙げていくと、晴希はそれくらいうんと頷いている。

同意を示すのなら何故、とますます疑問の色が濃くなった。

「じゃあさ、美味しくて、でもリーズナブルな居酒屋とかあったら嬉しいよね？」

「そりゃ嬉しいわよ。友達と呑みに行くことだってあるんだし、値

段が変わらないなら、絶対に美味しい方がいいじゃない」

「うん、俺はそういう店を作りたいわけ」

変わらぬ笑顔で答える晴希だったが、それでも咲子はまだ納得しきれなかった。

それならば別に、他の飲食店でも問題がない気がしたのだ。

そんな咲子に気付いたのか、晴希は更に言葉を繋げた。

「大学時代の出逢いって貴重だしさ、社会人になった時の付き合いだとかってのも大事だろ？ で、そういう時に一番頻繁に使われるのって居酒屋だと思うんだよな。その居酒屋がさ、美味しい料理と落ち着く雰囲気を提供できたら、たとえばコンパや飲み会が盛り上がるのに一役買えると思うし、まだ打ち解けてない会社の上司とも話が弾むんじゃないかなーって。やっぱり、美味しいもの食べてる時って、人間幸せだろ？」

そこで、ようやく咲子はそこまで考えがあつたのだと腑に落ちた。同時に、晴希が思っていた以上にしっかりと将来を考えていることに感心してしまった。

「渡辺って、意外に計画性あるのね」

「意外につて……、俺そんなに行き当たりばつたりに見える？」

「あ、ごめん。見える」

「咲子さーん！」

口ではそう言っただけからかいながらも、心の中では尊敬する気持ちが生まれていたのは確かだった。

そして、同時に羨ましくもある。

咲子はこれといって将来を決めているわけではなかった。

経営学部を選んだのも、両親の言む飲食店の助けになればいい程度の考えで、あとは就職時に大卒であつたほうが幾らかマシなはずだと考えたからだ。

晴希のような明確なビジョンがあるわけでない自分が、少し恥ずかしくなった。

けれど、それを表に出しても仕方がなく、これから自分自身で見

つけていけばいいと前向きに考える。切り替えが早いのも、咲子の長所の一つだ。

妬みにも似た微かな感情はさっさと頭の隅に追いやって、素直に晴希を応援することを決めたのだった。

そんな風に咲子と晴希の友好的な関係が続いている中、妹の妙子が咲子の行動の変化に気付いたようだった。

以前に比べて出かける回数が増えたので、それも仕方がないだろう。

その日は晴希ではなく、高校時代の友達との約束で出掛けようとしていたのだが、玄関先まで妙子は見送りに出てきたかと思うと、ニヤニヤしながら咲子の服の裾を引っ張った。

「何よ、気持ち悪いわね」

「サキサあ、もしかしてデートお？」

「はあ？ 今日ほマりに会うって言ったじゃない」

「でもお、最近よく出掛けるでしょお？ もしかして、この間の合コンで彼氏できちゃったのかなあって……」

合コンでの出逢いで付き合いが増えたことは確かだが、晴希は友達でしかない。

下手に嘘をつけば、うるさく追及されるだろうと思い、咲子は「友達ができただけよ」

と素っ気なく返した。ところが、『友達』というフレーズに、妙子が思った以上の反応をした。

「友達い？ そんなこと言っても、絶対サキに気があるってえ！」

「アンタの価値観で測らないでくれる？ 渡辺はそういうんじゃないわよ」

「へえ、渡辺君っていうんだあ。ね、ね、かつこいいの？」

明らかに話を聞いていない妙子に、咲子の苛立ちは増すばかり。

けれど、そんな空気も読んでくれないのが、妙子が妙子たる所以

だ。背は？ 車は？ などと、咲子にとってはどうでもいいような質問を幾つも重ねていく。

不機嫌が頂点に達した咲子は、いまだに服を掴んでいた妙子の手を乱暴に振り払い、玄関のドアを開けた。

「タエ、うざい。これ以上そういうこと言つなら、二度とタエの頼みごと聞かないから」

早口でそう言い残すと、振り切るように外へ出た。背後からは、縋るような妙子の謝罪の声が聞こえる。それを無視して足早に駅へと向かい、目的地へと繋がる電車に乗り込んだ。

待ち合わせの場所は、最寄り駅から二駅目にあるターミナル側の喫茶店。咲子が辿り着いた時にはすでに友人の姿があった。

「早いね、マリ。私も早めに来たつもりだったのに」

「いつもサキを待たせちゃうからねー。今日は勝った」

小さくガッツポーズを作るマリこと真田万里江に、咲子は先程までの苛々を忘れて笑みを零した。

万里江の座る席の正面に腰を下ろし、空いている椅子にバッグを置く。

店員が注文を取りに来たのでホットコーヒーを頼んだ後、つい大きな溜め息をついてしまった。

「何？ 既に疲れてない？」

「うん、まあ。出がけにタエがね」

思い出すと自然と眉間に皺が寄る。

咲子のうんざりとした表情に、万里江はくすくすと笑い出した。

「タエちゃん、相変わらずなんだ？」

「相変わらず過ぎよ。少しは成長つてモンをしてくれないかしら」

「とか言いつつ、サキはタエちゃんに甘いもんね」

「そんなことないって。結構厳しく言ってるわよ？」

万里江が言うほど、妙子を甘やかした記憶はなかった。

むしろ、何かやらかす度に、きつい言葉で叱責したことの方が多

いと思う。

しかし万里江は、不満そうな咲子に頭を振った。

「口で言っても、結局タエちゃんを突き放せないでしょ？ 最終的には、絶対助けてるんだもん。そりゃあ、タエちゃんもサキ離れできないと思うよ」

二人のことをよく知る万里江に言われてしまつては、返す言葉もなかった。

確かに、咲子はいつも妙子を見放すことができない。それは身内の情もあるだろうし、妙子自身に切り抜けるだけの力がないからだと理解しているからだ。

けれど、第三者から見た場合、それは妙子を甘やかしているとか見えないらしい。

「そっか、私、甘いのか」

「ま、サキに彼氏でもできれば変わるんじゃない？」

「何で？」

「彼氏ができたら、必然的にタエちゃんと一緒に時間減るでしょ？ 時には、タエちゃんより彼氏優先することだってあるはずだしさ、タエちゃんが甘える機会が無くなるんじゃないかな」

万里江の言い分はわからなくもなかったが、それはかなり現実的ではないと思わずにはいらなかった。

咲子は彼氏など必要としていない。作るつもりもない。それは、長い付き合いの万里江だって、充分に承知しているはずだった。

「まーた難しい顔してー。どうせ『彼氏なんて作らないから、そんなのは空論だ』とか思ってるんでしょ」

「わかつてるんじゃない」

「タエちゃんもだけど、サキも相変わらずだねー」

久しぶりに会っても変わらぬ咲子の頑なさに、呆れるというよりは感心したといった様子で万里江は吐息を洩らした。

そんな万里江の態度を不服としたのか、話の途中で運ばれてきていたコーヒーにミルクだけを加え、少し怒ったようにしつこいくら

いかき混ぜる。

「そういうマリはどうなのよ」

「私？ 私も相変わらずよ。子供と旦那の世話で、手一杯」

面倒臭そうな口振りとは正反対に、万里江の表情は幸せに満ちていた。

万里江は高校を卒業してすぐに、以前から付き合っていた二つ上の先輩と結婚をした。

いわゆる『できちゃった婚』ではあったのだが、もともと二人とも結婚も視野に入れていたらしく、二年ほど経った今でも円満に過ごしているようだ。

恋愛に興味のない咲子ではあったが、万里江のような人生も悪いものではないと理解している。

自分には到底できないとは思うが、家事や子育てに追われつつも充実感を伴った表情の万里江は、とても輝いて見えた。

「でもね、子供は良いよー。サキも早いうちに結婚して、さっさと産みなよ」

「あのね……。恋愛しないって言うてる人間に、『早く結婚して子供産め』はないでしょ」

「何言ってるの。恋愛と結婚は違うんだから」

その言葉は、一般的によく耳にするものではある。

けれど、まさか完全な恋愛結婚の万里江の口から出てくるとは、思いもしなかった。

「でも、真田先輩のこと、好きで結婚したわけでしょ？」

「そうだよ。でも、ただ好きだけだったら、結婚しなかったと思うもん。まだ若いんだしさ」

「そうなの？」

疑問だらけの咲子の問い掛けに、万里江はゆっくりと頷いた。

それでも、お見合いなどでもない限り、結婚は恋愛を経て辿り着くものだと思っていた咲子には、俄かには理解できない話だ。

「理解不能？」

「そうね。まあ、結婚する気ないから、私には関係ないとも思うわ」
苦笑混じりに、素直に答えると、万里江は「サキらしいね」と一
緒になつて笑つた。

それから、しばらく互いの近況などを語り合つた後、夕食をとる
為に店を移動することにした。万里江が、お気に入りのお店がある
のと案内してくれたのは、日本的な外観の小料理屋だった。

「いいお値段しそうね」

「そう思うでしょ？ でも、そうでもないんだよ。コースの金額も
幅広いし」

大体、うちの旦那の稼ぎじゃ、そんなに高級なお店には行けない
わよ、と冗談めかして笑う万里江に、失礼ながら咲子も納得してし
まつた。

笑みを交わし合いながら、入口を開け暖簾をくぐると、木目の温
かさを感じる、落ち着いた雰囲気の内装が目に入ってきた。

カウンター席が五席と、四人ほど座れる座敷が三つで、人数が多
ければ、テーブルを繋いで対応できそうな様子だ。

全体的にこぢんまりとまとまっている店内は、まだ開店時間から
間もないためか、他の客の姿はない。

いらつしゃい、とカウンターのの中から大将らしい男性が低く渋い
声音で発すると、追いかけるように若い男の声で同じ言葉が続く。

「二人なんですけど、お座敷でも大丈夫ですか？」

万里江がそう訊く間に、奥の座敷を整えていたらしい若い店員が
小走りに近寄ってきた。

「大丈夫ですよ」

「咲子さん？」

大将が答えるのとはほぼ同時に、咲子のよく知った声が被さつた。

「え？ 渡辺の働いてるお店って、ここだったの？」

「サキ、知り合い？」

「何だ、ハル坊の友達か？」

咲子は晴希を、万里江は咲子を、大将は晴希を、それぞれ驚いた表情で見つめていた。

「大学の友達なんです。真田さんの奥さん、咲子さんのお友達だったんですね」

「そうなんだ。でもバイト君がサキの友達だなんて、すごい偶然だね」

「俺もびっくりしました。あ、すみません。お座敷ですね」

世間話になりそうなところで、晴希が我に返って二人を座敷へと案内する。

予想外のところで会ってしまい、何だか奇妙な気持ちを抱えながら、咲子は座敷に上がり、腰を下ろした。

晴希は慣れた手つきでお茶やおしぼり、お品書きなどを用意し、「お決まりになったらお呼び下さい」と言い残してその場を離れていく。

「てことは、ここが目標のお店ってことか」

「え？ 何？」

「うっん、何でもない。注文は万里江に任すわ。結構来てるんですよ？」

晴希が万里江の苗字を知っていたことから、この店にはそれなりの回数訪れているとわかる。ならば、何が美味しいのかもある程度知っているだろうと思い、咲子は万里江に任すことにした。

お品書きに目を落とす万里江を余所に、咲子は改めて店の中を見回す。

白木に貼られた、『本日のおすすめ料理』の達筆な文字。品良く飾られた、書と季節の花。座敷席の灯りは控え目で、補うような形で間接照明が置かれている。

よくある居酒屋の雑然とした雰囲気とは似ても似つかない。

けれど、もしここを手本とした居酒屋を作るのなら、咲子にとっては非常に好ましい空間が出来あがるのではないかと思えた。

「この『椿』のコースでいい？ 値段も量も丁度良さそうだし」

「いいわよ」

「じゃあ、呼ぶね。すいませーん」

呼び声に、晴希が元気の良い返事を返し、早足でやってくる。

万里江が注文を告げると、伝票にすばやく書き留め、しっかりと確認してから戻っていった。

万里江は晴希が厨房の方へと入ることを見届けると、少し声を潜めて咲子を見遣る。

「それにしても、珍しいね。サキに男友達って」

「うん、私もそう思うわ」

大学では、サークル活動などもしていない咲子は、男友達を作る機会などほとんどなかった。当然顔見知りの男子はいるけれど、話しかけられれば答える程度で、それ以上親しくなる必要性も感じていない。試験や講義に関する情報を交換できる女友達が数人いれば、何の不自由もなかった。

高校時代にも咲子にほとんど男友達がいなかったと知っている万里江には、不思議に思えたのだろう。

「仲、良さそうじゃない」

「食べ物好みは合うのよね。よく食べ歩きに付き合わされたりするし」

「……ねえ、付き合ってるってわけじゃないよね？」

更に声を低くし、窺う様子の万里江に、咲子は反射的に顔を顰めてしまった。

「マリまでそういうこと言う？」

「ってことは、他にも言われたんだ」

「タエよ。来る前にウンザリすることがあったって言ったでしょ」

おしぼりの端を苛々といじりながら、咲子は盛大な溜め息をつく。それになるほど思ったのか、マリはすぐさま謝罪し、言葉を続けた。

「タエちゃんにしつこく訊かれたんだ。でも、普段のサキを知っていると、それも無理ないかもね」

「友達だつて言つてんのに、しつこ過ぎるのよ、タエは。あの何でもかんでも恋愛に結び付ける思考回路はどうにかしてほしいもんだわ」

憤慨する咲子を、興味津々の眼差しで万里江が見つめる。

万里江も僅かながら、咲子と晴希の関係を疑っているようだった。「言つとくけど、本当に何も無いわよ。渡辺も、今は恋愛嫌悪気味だし」

「そうなの？ 結構モテそうなのに」

「だからなんじゃない？ 話聞く限りでは、かなり辟易してるみたい」

「あー、モテるが故の苦惱かー」

羨ましい限りねと茶化すような万里江に、そんなもんかしらと咲子は常と変わらず淡々とした口調。

「でも、そう考えたらちよつと似てるよね、サキと渡辺君」

「どこが？」

「モテるのに、恋愛したがないところ」

自信満々に言う万里江に、咲子はまたも眉間に皺を寄せた。

今までの人生で、モテた記憶などない。それに、もし万里江の言うとおりだったとしても、咲子にとっては迷惑以外の何ものでもなかった。

咲子の表情から、何を考えているのか悟ったのか、万里江は苦笑を零す。

しかし、ふと真面目な顔に戻り、

「でもさ、もし渡辺君に彼女できたらどうするの？」

そんな質問を投げかけてきた。

言われてみれば、それはさほど可能性が低くないことに気付く。

咲子とは違い、もともと晴希には過去に付き合った女性何人がいる。

今は恋愛する気がなくても、そのうち今までとは違って、晴希が心を許せるような相手が出てくることも有り得るのだ。

そんな状況を少し想像してから、咲子は徐に口を開いた。

「どうもしない、かな」

「どうもしない？」

咲子の答えに、万里江は意外さを隠せないようだった。

補足するように、咲子は続ける。

「別に、恋愛は渡辺の自由だし、彼女出来たらそれはそれでおめでとつって話じゃない。ただ、やっぱり彼女に申し訳なくなるから、今みたいに一緒にご飯食べに行ったりするのは出来なくなるでしょ。それは少し惜しいかな」

「惜しい？ 寂しい、じゃなくて？」

「うん。惜しいっていう方が適切な気がする。渡辺って、色々となのよね。気を遣わなくていいし、妙に女扱いしないし。何か『男』って感じないのよ」

恋愛対象として相手を見る時、やはりそれが態度や行動に現れると咲子は思っている。

自分をよく見せようとしたり、共通点を見つけ出そうとしたり、言い方は悪いが、媚を売るような発言や行為が見えるだろう。

しかし、晴希は咲子を対等に扱う。自分を下げるわけでも、咲子を持ち上げるわけでもなく、同じ目線で話し、行動するのだ。

それが咲子にはとても心地良かった。

「ふーん、本当に友達なんだー」

「だから、そう言ってるじゃない」

「じゃあさ、もう一個質問。怒らないで答えてね」

そう前置きすると、万里江は少し顔を近付け、咲子にだけ聞こえる声で囁いた。

「渡辺君に付き合ってくれて言われたら、どうするの？」と。

「失礼します」

タイミングがいいのか悪いのか、晴希がお盆に数品の料理を乗せて運んできた。

すぐさま万里江は身体を引き、愛想笑いのようなものを浮かべる。素朴な味わいのある器にセンス良く盛られた料理を、丁寧な手つきで並べると、晴希は簡単に料理の説明をした。

「あれ？ このカブのみぞれあんって、コースに入ってた気が……」

お品書きになかった一品に気付き、万里江が晴希に確認をとる。すると、晴希は砕けた表情で笑った。

「それは、俺からのサービス。美味しいと思うから、食べてみて」言葉の後半は、咲子に向けられていた。

多分、「咲子の好みの味だから、食べてみて」なのだ判断する。「よし、食べよう！ あー、どれも美味しそう！ いただきます！」

嬉しそうに声を上げる万里江に、咲子も同じ思いを抱きながら、箸を手を取った。

手を合わせて小さくいただきますと呟くと、早速晴希の好意であるカブから箸をつける。

一切れ口に入れると、しっかりと出汁が染み込み、優しい甘さを持ったカブの旨みが拡がった。

「ホントだ。美味しい」食事に行く機会が多いただけあって、咲子の好みをしっかりと理解しているらしい。

思わず笑みが零れそうな美味しさに、咲子の箸は進んだ。

「で、さっきの答えは？」横目でチラチラと晴希の動きを確かめながら、万里江が答えを促す。

食事の満足さに、一瞬何の話だったかと忘れかけていた咲子は、ああと小さく声を上げると、眉尻を下げた。

「それは困るわ」
「え？ 困るの？」

「だって、そういうのがないから、渡辺とは一緒にいられるんだし。そんなことを言われたら、一瞬で渡辺を嫌いになりそう」

それは、咲子の本心からの言葉だった。

恋愛感情が差し挟まれた瞬間、晴希と過ごす居心地の良い時間はなくなってしまう。

そう思うと、晴希に彼女ができてしまう以上に、避けたい状況に思えた。

「でも、気は合っんでしょ？」

「だから、友達だからこそ、なんじゃない？ 恋愛になったら、男の態度って変わるもんだと思うし」

本当に、恋愛など煩わしい。改めて咲子はそう感じる。

どうして、男女が一緒にいるだけで、真っ先に恋愛関係を疑われるのか。

今後も晴希との関係を、こんな風に勘繰られるのかと考えるだけで憂鬱になり、ますます恋愛に対してプラスの感情を持たなくなるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2736z/>

はなひらかねど

2011年12月11日09時49分発行